

「森銑三刈谷の会」だより No. 15

発行 2022年12月17日(月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日14:00-16:00市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp



図 『小さな星』
創刊号表紙(1921
年7月)。(刈谷市教
育委員会編「森銑
三生誕百年没後十
年記念展 併催森三
郎展」[1995]冊子
掲載)

第15回(2022/11/19)「高崎南小学校代用教員時代の森銑三」参加14人 (長瀧秀雄)

森銑三は町立刈谷図書館での村上文庫整理の仕事終了後、1918年4月より亀城尋常高等小学校代用教員として5年生の学級の担任になった。しかし、同年11月大道社発行の機関誌『帝国民』編集者になるため刈谷を去り、上京する。『帝国民』編集者としての仕事は自分の思いとは違う点が多く、1920年(大正9)8月に高崎南尋常高等小学校代用教員として赴任し5年女子組を受け持った。月給36円。25歳。

森は授業中『赤い鳥』にある童話を語って聞かせ、北原白秋や西条八十の童謡ばかりを教えていた。当時、大正デモクラシーの風潮が高まり、高崎でも新しい教育運動が起こっていた。1921年(大正10)2月に、画家の山本鼎の提唱した児童自由画運動に共鳴した井上房一郎を中心として「群馬県児童自由画展覧会」が高崎市公会堂で開かれた。銑三は自由画に共鳴して手伝いをした。

同年の7月、銑三と栗原長治(高崎東小)の二人の青年教師によって、子供のための童謡雑誌『小さな星』が創刊された。『赤い鳥』の影響を受け、子供の個性と創造性の開発を目指した。県内外に読者を拡大し、発行部数も増加したが当時の教育界に受け入れられず、1922年(大正11)3月、代用教員の森は免職、栗原は山間部へ転任させられ、4月号の第10号で廃刊となった。銑三は、その怒りを、同年4月16日から5月4日に上毛新聞で「餓れた教師の手記」として7回にわたって連載した。27歳。その後、高崎から東京へ戻り、江戸文学研究の道を歩んだ。(高崎市ホームページ「第31回『自由画展』と『小さな星』

私が、大学卒業後教員採用試験に3回落ち続け、愛知教育大学教育専攻科に在学した50年前、朝日新聞の記事から上田自由大学運動に興味を持った。上田市を訪ね、関係者の話を聞く中で、山本鼎の自由画運動と農民美術運動を知った。山本鼎記念館館長の山越蔵さんとの出会い・白秋の「落葉松」を口ずさみ歩いた菅平・小諸城・小海線の旅等が、今回、高崎南小学校代用教員時代の森銑三の記事を読んだら、一気に思い出された。児童自由画運動への関わりや『小さな星』を発刊した銑三に親近感を抱いた。

次に、代用教員で餓られるという点で、石川啄木につながった。1906年(明治39)4月、岩手県洪民尋常高等小学校代用教員として、尋常2年を受け持つ。21歳、月給8円、校長18円で村内最高額。小説『雲は天才である』を書き、日本一の代用教員を目指した。翌年4月、高等科の生徒を引率して、校長排斥のストライキを指示したことにより、免職。その後、北海道を転々とする生活。東京へ出てからも苦しい生活が続く、1912年(明治45)27歳の若さで死去したが、歌集や詩集などで人々の心に生き続けている。

銑三の手記の中で特に共鳴したのは、

「私の心に描く教師は、子供に愛を持ち、共に思惟し、共に嬉戯し、子供の心に同化し得る人にあった」

「教案などというものはつけなくても授業は出来ると信じていた私は、自分で書く必要を認めない限りなるべく書かない方針を取ることにした」という点。

銑三と私が似ている点は、体が弱くて、百姓は無理だから、役場勤め位しか出来ないだろうと言われながらも長生きなこと、「青年は圭角あれ」という黒岩涙香の心意気で教員生活を送ったことだろう。

異なる点は、「漫画は駄目だ」という銑三に対し、子供の頃から今に至るまで漫画好きで、大学生の頃には白土三平『カムイ伝』や手塚治虫『火の鳥』で歴史観を身につけた事である。本を読むようになったのも高校2年生からであった。銑三は、三河武士としての気概を持っていたと思われるが、私は水呑百姓の家に育ち、『カムイ伝』の百姓正助のように生きたいと想ってきたことである。

今後予定

- 2022/12/17(土) 長瀧秀雄「高崎南小学校代用教員時代の森銑三」No.2
- 2023/1/21(土) 森銑三の随筆を読む